

第三節 京築地域の弥生文化

一 各時期の遺跡

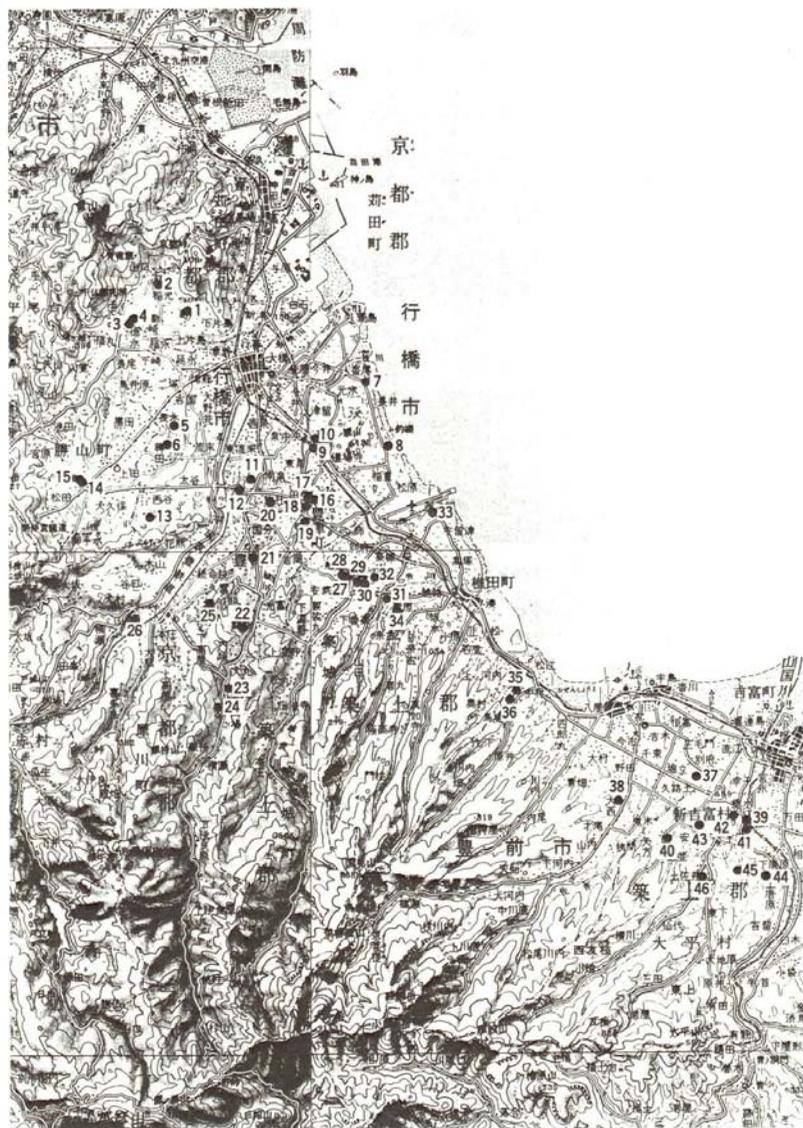
縄文時代中期に頂点に達した海進現象もしだいに衰え、その後の海退現象と河川の堆積作用により砂層や泥層が堆積し、縄文時代終末期には内陸部から沖積平野が形成されていった。その結果、京築地域の北部では小波瀬川・長峽川・今川・祓川などの中流域で扇状地・河成平野・湿地が広がっていったが、現在の行橋市街地の行事・大橋地区や今井地区より北東部は、弥生時代にはまだ内湾になっていた。

当地域の弥生時代の遺跡は前期初頭から存在し、その後古墳時代に入るまで平野部や内陸部で数多く発見されている(第41図・第2表参照)。遺跡の分布状況は水稻耕作の場となっていた平野や河川の後背湿地の面積が広い、行橋市や京都郡などの北部にやや集中する傾向がある。

前期

前期前葉の板付Ⅰ式土器が出土した遺跡としては、行橋市長井遺跡と辻垣遺跡とがある。長井遺跡は京都平野東部の海岸砂丘にあり、縄文時代晩期の夜臼式の甕と板付Ⅰ式の壺が出土している。辻垣遺跡は祓川が平野部に出て扇状地が形成され始める地形に位置する低地性環濠集落と考えられており、東西約三五メートル、南北約一三〇メートルの範囲に、貯蔵穴と住居跡の可能性のある長方形土壙が発見さ

第3章 弥生時代



第41図 京築地域の弥生時代の主要遺跡分布図 (縮尺1/280,000)

第2表 京築地域の弥生時代の主要遺跡一覧表

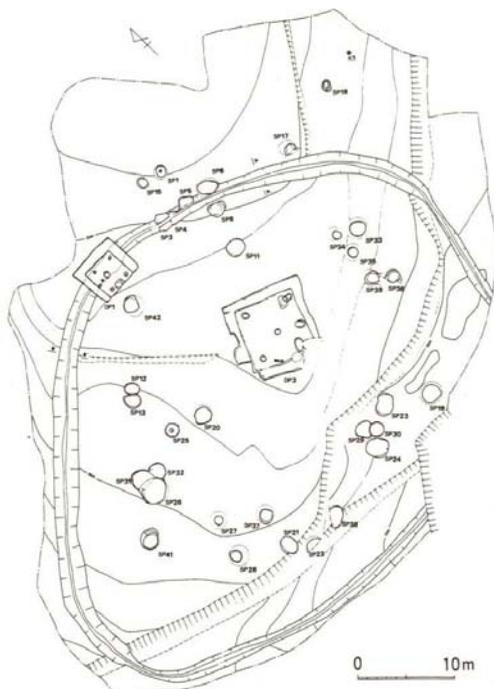
番号	遺跡名	所在地	時期	備考
1	葛川遺跡	京都郡苅田町大字葛川	前期中葉～後期	環濠集落、住居跡6軒・貯蔵穴35基他
2	谷遺跡	京都郡苅田町大字谷	後期～古墳時代初頭	住居跡10軒他
3	黒添・宮の下遺跡	京都郡苅田町大字黒添	前期後葉	貯蔵穴5基・土壌1基他
4	木ノ坪遺跡	京都郡苅田町大字法正寺	前期末～古墳時代前期	住居跡93軒・貯蔵穴15基他
5	前田山遺跡	行橋市大字前田・検地	前期末～後期	貯蔵穴10基・埋葬施設246基他
6	下稗田遺跡	行橋市大字下稗田	前期後半～古墳時代初頭	住居跡243軒・埋葬施設283基他
7	長井遺跡	行橋市大字長井		墓地
8	石並遺跡	行橋市大字稲童	前期	集落跡
9	辻垣ヲサマル遺跡	行橋市大字辻垣	前期後半・後期	円形周溝他
10	辻垣畠田・長通遺跡	行橋市大字辻垣	前期	貯蔵穴5基他
11	竹並遺跡	行橋市大字竹並	前期末～後期初頭	住居跡19軒・埋葬施設19基他
12	矢留遺跡	行橋市大字矢留	前期後半～古墳時代初頭	住居跡23軒他
13	内屋敷遺跡	行橋市大字津積	中期末～後期前半	住居跡3軒・貯蔵穴4基他
14	上所田遺跡	京都郡勝山町大字箕田		箱式石棺墓・石蓋土墳墓
15	亀田南遺跡	京都郡勝山町大字箕田	後期～古墳時代初頭	石蓋土墳墓5基・土墳墓2基
16	源左エ門屋敷遺跡	京都郡豊津町大字徳永	中期	住居跡1軒・甕棺墓1基
17	徳永川ノ上遺跡	京都郡豊津町大字徳永	前期後半～古墳時代初頭	住居跡・貯蔵穴・墳丘墓他
18	神手遺跡	京都郡豊津町大字徳永	前期後半～古墳時代初頭	住居跡11軒・埋葬施設12基他
19	カワラケ田遺跡	京都郡豊津町大字岩見	中期	貯蔵穴6基他
20	金築遺跡	京都郡豊津町大字惣社	前期後半～中期前半	住居跡約10軒・貯蔵穴約20基他
21	平遺跡	京都郡豊津町大字上坂	後期	石棺墓1基
22	北垣遺跡	京都郡豊津町大字節丸	後期	石棺墓8基・石蓋土墳墓4基他
23	タカデ遺跡	京都郡犀川町大字木井馬場	前期中葉～後葉	住居跡1軒他
24	寺門遺跡	京都郡犀川町大字木井馬場	中期	住居跡2軒他
25	末江遺跡群	京都郡犀川町大字末江	前期～中期	住居跡7軒・貯蔵穴20基他
26	山鹿遺跡	京都郡犀川町大字山鹿		集落跡
27	安武・深田遺跡	築上郡築城町大字安武	中期後半～後期	住居跡9軒・甕棺墓1基・土墳墓3基他
28	安武・土井の内遺跡	築上郡築城町大字安武	後期後半	住居跡1軒
29	十双遺跡	築上郡築城町大字赤幡・広末	後期～古墳時代前期	住居跡31軒他
30	赤幡森ヶ坪遺跡	築上郡築城町大字赤幡	後期	住居跡3軒？他
31	広末・安永遺跡	築上郡築城町大字広末	中期	住居跡14軒・貯蔵穴他
32	赤幡・下清水遺跡	築上郡築城町大字赤幡		
33	西八田平原遺跡	築上郡椎田町大字西八田	後期終末～古墳時代初頭	住居跡1軒他
34	広幡城遺跡	築上郡椎田町大字水原	前期中葉～後葉	住居跡6軒・貯蔵穴9基他
35	中村・石丸遺跡	豊前市大字中村	中期	土墳墓
36	団後遺跡	豊前市大字中村	後期	住居跡2軒他
37	小石原泉遺跡	豊前市大字六郎・小石原	後期後半～終末	住居跡3軒・高床倉庫2棟他
38	大西遺跡	豊前市大字大西	後期後半	土墳3基他
39	中桑野遺跡	築上郡新吉富村垂水	前期末～中期中葉	住居跡6軒・貯蔵穴他
40	尻高畑田遺跡	築上郡新吉富村大字尻高	中期後半～後期前半	住居跡10軒・土墳墓1基他

第3章 弥生時代

番号	遺跡名	所在地	時期	備考
41	牛頭天王公園遺跡	築上郡新吉富村大字垂水	中期前半	掘立柱建物跡5棟・貯蔵穴2基他
42	高木遺跡	築上郡新吉富村大字垂水	中期	住居跡他
43	安雲ハタガタ遺跡	築上郡新吉富村大字安雲		掘立柱建物跡5棟
44	金居塚遺跡	築上郡大平村大字下唐原	中期～後期	墓地
45	穴ヶ葉山遺跡	築上郡大平村大字下唐原	後期	石蓋土墳墓86基・土墳墓2基
46	土佐井ミソソデ遺跡	築上郡大平村大字土佐井	中期	住居跡3軒・貯蔵穴3基他

れている。ただし、この環濠は水害から集落を守るために作られたものと推定されている。遺物では夜臼式系と板付I式の壺・甕がともに出土している。この二つの遺跡はともに海岸部や内湾部に面した場所に立地する点が共通している。前期中葉の板付II A式の時期では、苅田町葛川遺跡と豊津町神手遺跡がある。葛川遺跡は京都平野部の標高二〇メートル前後の低丘陵の先端部に位置し、南東側約一キロメートル以内に入っていたと考えられる。遺跡は東西五七メートル、南北四三メートルの卵形をなす環濠とその内外に分布する三五基の貯蔵穴とからなる(第42図)。

貯蔵穴は床面の平面形が円形ないし楕円形のもので大部分である。神手遺跡もこの時期から前期後葉にかけての遺跡で、環濠と貯蔵穴からなる



第42図 苅田町葛川遺跡全体図

第2編 先史・原史

集落である。

前期後葉の板付ⅡB式の時期になると、行橋市下稗田遺跡しもひえだで大規模な拠点集落が形成される(第43図)。当遺跡は約三三万平方メートルにのぼる宅地開発に伴う調査で、その全容が明らかとなった複合遺跡である。集落は標高二〇〇〜三〇〇メートルの低丘陵上に立地しているが、環濠は発見されていない。

当遺跡の集落は既に前期中葉の段階で住居跡七軒・貯蔵穴九二基が営まれていたが、後葉ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ地点で合計で住居跡八八軒・貯蔵穴一〇四五基、全体では同時に二〇〜三〇軒程度の住居が存在したと推定される集落である。なお、当遺跡の集落は中期の前葉でも住居跡四〇軒・貯蔵穴二八七基が検出され、最終的には中期後葉まで住居跡が営まれ続けている。前期から中期にかけての遺構の合計は住居跡一六六軒・貯蔵穴一八三六基にのほっている。墓地は集落の北方と南方の



第43図 行橋市下稗田遺跡全景 (行橋市教育委員会提供)

二か所の別の丘陵上にある。小児の一部については集落内の甕棺墓などに葬られている。全体としては石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓・甕棺墓などの埋葬施設二八三基と祭祀遺構二七基が確認されている。副葬品は石剣一本を持つ土壙墓が一基、勾玉・管玉などの玉類を持つ土壙墓が五基あるが、青銅製品などの特に際立つた副葬品を持つ埋葬施設はない。行橋市竹並遺跡は京都平野南部に延びる錦原丘陵北端部の、標高五〇メートル前後に位置する。弥生時代では前期後葉から中期前葉にかけてと中期後葉から後期にかけての集落と墓地とからなる。前期後葉から中期前葉にかけての集落を構成する遺構は、住居跡一軒と貯蔵穴九二基である。

この時期の墓地は集落のある丘陵から南方に派生した丘陵上にあり、石蓋土壙墓・土壙墓・木棺墓・壺棺墓など一九基からなる。前期後葉の他の遺跡としては、苅田町黒添・宮の下遺跡・行橋市矢留遺跡・犀川町タカデ遺跡・椎田町広幡城遺跡などのほか新吉富村中桑野遺跡があるが、小規模で分村的な集落ばかりである。

中期

中期前葉には、京築地域南部でもまとまった集落が営まれるようになる。築城町広末・安永遺跡は小山田川が平野部に出る左岸の、標高三〇メートルの舌状台地上にある。前葉から中葉にかけての住居跡一五軒のほか多数の貯蔵穴が発見されている。1号住居跡は床面中央部に炉跡を持つ大型の円形竪穴住居跡で、直径九・六メートルを計る（第44図）。新吉富村中桑野遺跡の集落も主体はこの時期にある。

前期後葉から中期前葉の集落は、平野内や縁辺部に延びる丘陵上に位置するものが多い。京築地域北部でも苅田町木ノ坪遺跡では前半の住居跡六軒、豊津町徳永川ノ上遺跡では住居跡五軒などが確認されている。

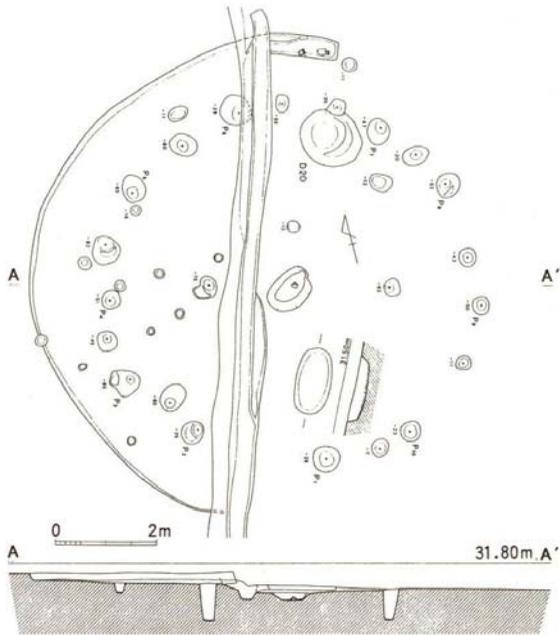
中葉から後葉にかけては、全体的に遺跡が減少してくる。代表的遺跡に築城町安武・深田遺跡がある。この遺跡は城井川が平野部に出てくる標高三四メートル前後の左岸の後背地にある。中期後葉から後期後葉にかけ

ての円形および方形の竪穴住居跡が八軒調査された。また、行橋市内屋敷遺跡は京都平野南部の御所ヶ岳山塊から北側の標高二三メートル程度の低丘陵上にある遺跡で、中期末から後期前半にかけての住居跡が三軒見つかっている。

行橋市前田山遺跡では、前期末から古墳時代初頭の大規模な墓地があり、石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓・甕棺墓などが二四基調査されているが、主体となる時期は中期である。

後期 後期前葉の遺跡はまだ少ないが、中葉以後に増加し、後葉から古墳時代初頭の時期に大規模な集落が営まれるようになる。

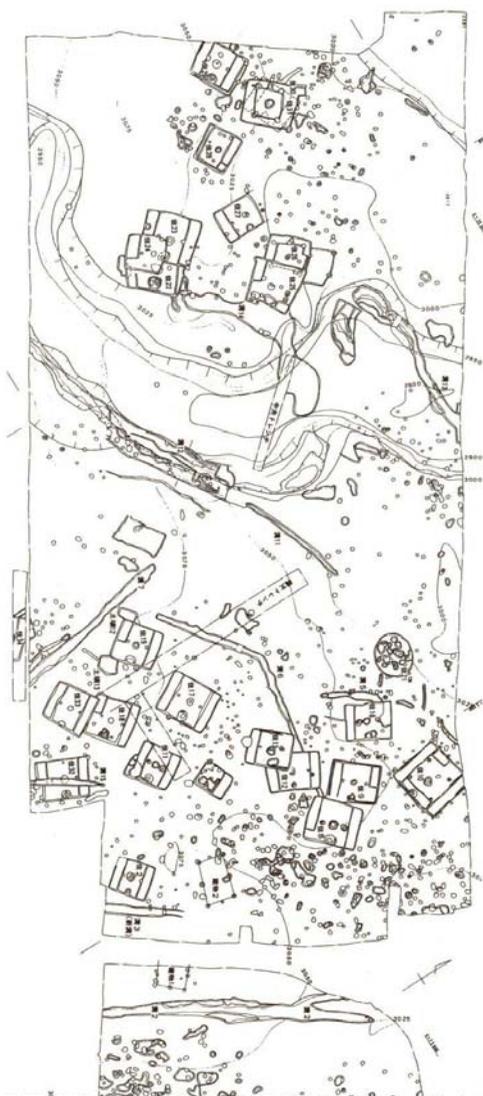
木ノ坪遺跡は京都平野西部の縁辺部の標高一八〜二〇メートル程度の低い台地上にある。発見された住居跡のうち、七〇軒以上が後期後半から古墳時代初頭に属するものである。築城町十双遺跡は城井川が下流域に入って形成した標高三〇メートル前後の沖積平野に位置し、中葉から古墳時代初頭にかけての住居跡三軒が発掘された(第45図)。荻田町谷遺跡は京都平野北西部奥の低丘陵の西側裾部に位置し、標高は一七



第44図 築城町広末・安永遺跡1号住居跡
(縮尺1/150)

トド前後である。後期末から古墳時代初頭の住居跡が八軒調査された。このように、この時期の集落は平野の奥まった地域で、標高の低い台地や沖積地に新たに形成される傾向があり、多くは現在では水田として開墾されている場所にある。このほか、下稗田遺跡で住居跡七七軒、矢留遺跡で住居跡二〇軒程度、豊前市小石原泉遺跡では終末期の住居跡三軒と掘立柱建物跡二棟が調査されている。徳永川ノ上遺跡では後期末の住居跡一六軒が発見されたが、すべて火災に遭っていた。

この時期の代表的墓地である大平村穴ヶ葉山遺跡は、山国川西岸の標高約七〇メートルの小高い丘陵上にあり、石蓋土壙墓八六基・土壙墓二基が密集して発見された(第46図)。地形の状況からみて、一〇〇基を大幅に



第45図 築城町十双遺跡配置図
(北西部のみ、縮尺1/800)



第46図 大平村穴ヶ葉山遺跡配置図

超える埋葬施設が営まれていたと推定される。この墓地の特徴は、大部分が石蓋土壙墓であり、内部にベンガラが使用されていることと、約八割程度の埋葬施設では地山削り出しの枕が設けられていることである。また、四割以上の石蓋土壙墓には、銅鏡片や鉄製の剣・素環刀・槍先・鏃などの武器と鋤先・鉈やりがな・刀子などの農・工具があり、硬玉製勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉・水晶製切子玉などの玉類も副葬されていた。徳永川ノ上遺跡は、終末期から古墳時代初頭の墳丘墓一〇基以上の存在が確実視されているが、墳丘墓という埋葬形態や銅鏡六面に代表される副葬品の内容からみて特定集団の墓地と考えられる。また、この時期には方

形周溝墓が当地域でも築造され、下稗田遺跡・竹並遺跡・北垣遺跡などで調査されている。

二 集落と墓地

弥生時代は、当地域においても集団や集落間の社会的関係が急速に変化していった時代であり、それに伴って集落が営まれる地理的環境や、集落を構成する各施設の様相もしだいに変化していった。

集落の立地環境

弥生時代前期の集落のうち、前葉・中葉の集落は京都平野に入り込んでいた内湾の沿岸部に沿って営まれるものが多い。これは初期の水稻耕作を行う場合、生産地である水田が、形成されつつあった沖積地の湿潤な低湿地に設定されたためと考えられる。辻垣遺跡では前葉の集落が、祓川下流の後背湿地に立地するが、水害に対する防御施設として環濠をめぐらしている。中葉の葛川遺跡も、同じ内湾の北西部に位置し、低丘陵の先端部に貯蔵穴群を取り囲む環濠をめぐらしている。また、長井遺跡や石並遺跡の場合、この内湾と外海の周防灘とを分ける海岸砂丘上に立地し、水田を開発する適地が少ないことから、この遺跡を残した人々は水稻耕作以外の狩猟・漁労などに従事していたことも想像される。前期後葉になると海岸から二〜三キロメートル入った平野の奥でも集落が営まれるようになる。しかも、急激にその数が増加するとともに、下稗田遺跡のような大規模な拠点集落が形成されるようになる。この時期には早くも犀川町タカデ遺跡のように河川の中流域でも小規模な集落が営まれるが、技術的にまだ耕作地として開発しにくい土地であることから、水稻耕作に伴うものか疑問が残る。